

インターディシプリナリーアプローチによる審美性の確保

清水 宏康

東京都 清水歯科クリニック 院長

講演抄録

欠損補綴の一つの方法として発展したインプラント治療は、全部欠損症例から始まり局部欠損症例へとその適用範囲を広げて行った。その過程において、インプラント修復に求められるものは噛めるもしくは痛くないといった最低限の機能的なものから、審美領域においてはより美しく、より自然にといったより審美的な結果が要求されるようになった。

そこで、インプラント修復において求められる審美性とは何かを考えると単に上部構造物としての色や形態といった単純なものではないことは自明の理である。一例として、**Belser** は、インプラント修復物の評価法として **White and Pink esthetics Score** を提案したが、これは、インプラント修復物の審美性を決定するものは、上部構造物そのものの色や形態だけではなくそれを取り囲むインプラント周囲組織をも含まれることを表現している。

このことから理解されることは、インプラント修復物に審美的結果をもたらすためには、修復物の完成度を高めるのみではならず、そのインプラント周囲組織の保存や再構築、さらには、当該歯隣接歯の有する審美的問題の解決も必要となってくるということである。つまり、審美性の確保のためには、個々の症例が抱えるさまざまな問題点をさまざま専門分野で発展してきた治療法を相互に効果的に利用することによって補完し合うことが重要であり、その結果として最終的に理想的な審美性を構築することができると考えられる。このように顕在化した問題点をどのように対処すべきかについて熟考を重ねた時、その問題が困難であればある程、その対処には様々な専門治療（インターディシプリナリーアプローチ）によるサポートが必要になることがある。本プレゼンテーションでは、インターディシプリナリーアプローチによる実際の治療例を紹介しながら審美性の確保について論議する予定である。